

【絶頂＝爆死】

オルガ暴走！

異形触手に無惨に犯される鋼鉄の聖女たち

～淫星獣の贄

虚空の絶頂に散る魔女たち～

【イッたら死ぬ♡ デスアクメ♡】

【オルガ・ファンタジー】シリーズ

魔力（オルガ）を狙われ、肉体の奥底まで犯され尽くす
絶望と凌辱のハードエロス・ダークファンタジー

著：XYZ_L

淫星獣の贄

虚空の絶頂に散る魔女たち



魔力（オルガ）を狙われ、肉体の奥底まで犯され尽くす

絶望と凌辱のハードエロス・ダークファンタジー

「オルガ・ファンタジー」シリーズ

著:XYZ_L

第3章:崩れゆく矜持——瑠璃の屈辱

「や、やだぁ！ イリス、セリーナ、助けて！」

背後からフィーアの悲痛な絶叫が響く。

栗色の髪を持つイリスは歯を食いしばり、必死に振り返りたい衝動を殺した。

今、自分に群がる目の前の敵から視線を外せば、自分も一瞬で肉塊になる。

「ごめん、フィーア……！ この下衆どもをすぐに片付けて、助けに行くから！」

イリスは瑠璃色の装甲を軋ませ、驚異的な反応速度で地を蹴った。

迫り来る二体の蹂躪型ハーヴェスター。

その恐るべき速度と軌道を、彼女の知的な頭脳は完璧に予測していた。

流れるような体術で鋭い鉤爪の連撃を掻い潜り、腰の『魂脈の射杖』を抜き放つ。

「そこよ！」

一切の無駄がない、精密な零距离射撃。

圧縮された魔力弾が一体の関節を正確に撃ち抜き、体勢を崩したところへ、間髪入れずに頭部へと最大出力の魔力弾を叩き込んだ。

閃光が極めて堅牢な銀黒の装甲を穿ち、醜い緑色の体液が噴き出す。

異形は苦悶の咆哮を上げ、黒い大地へと重々しく倒れ伏した。

（いける……！ どんなに装甲が硬くても、このまま脳髓を魔力で焼き尽くせば、フィアの援護に……！）

——ドオオオオンッ！！

だが次の瞬間、彼女の希望を打ち砕くように、けたたましい爆発音が戦場を揺るがした。

最悪の結末を知らせる、オルガギアの魔力臨界による自爆音。

風に乗って、むせ返るような血の匂いと、焼け焦げた真紅の装甲の破片が降ってくる。

「フィーア……！？ 嘘、でしょ……」

知的な彼女の思考が、仲間の無惨な死によって一瞬だけ真っ白に染まった。

そして、その悲痛な絶望こそが、戦場において彼女が犯した致命的な隙だった。

完全に沈黙したと思われていた眼前のハーヴェスターが、不気味に蠢き出し、死角に潜んでいたもう一体と共に跳躍して襲い掛かってきたのだ。

「え……！？」

脳髄を完全に破壊したはずだった。

生物としての致死量を超えているにも関わらず、破れた頭部から粘液を撒き散らしながら襲い来るといふ、論理を超越した生命力。

そのあり得ない光景への驚愕が、天才戦士の冷徹な思考を一瞬だけ凍り付かせたのだ。

凄まじい衝撃と共にイリスは吹き飛ばされ、黒く焦げた大地へと無様に叩きつけられる。

「が、はッ……！」

数トンにも及ぶ二体分の巨体が容赦なくのしかかり、肺から悲鳴ごと空気が絞り出された。

銃を取り落とし、身動きすら完全に封じられた彼女を嘲笑うかのように、二体の異形が前後から彼女の肢体を挟み込む。

「嘘……離して！ この、下衆どもが……！」

鋭い鉤爪が、引き締まった肢体を覆う瑠璃色の装甲を無残に引き裂いた。

あらわになった鍛え抜かれた豊満な臀部へと、脈動する肉の突起が密に並んだ極太の尾が這い回る。

そして躊躇なく、最も無防備で不浄な蕾を暴力的に貫いた。

「あ……！？ 嘘よ！ 私が、こんな汚物に……！ あ、ああ、いや、いやああああ！」

怒りと抗えない羞恥に満ちた絶叫が、瘴気の空に響き渡る。

温かく粘りつく尾の先端が、排泄のための穴を無理やりこじ開け、確実に侵入していく。

間髪入れず、正面に陣取ったもう一体の尾が、彼女の太腿を股関節が外れんばかりの力で割り開いた。

そのまま、準備すらできていない牝穴の肉壁を強引にこじ開け、最奥へと深く侵入してくる。

「うう……！ やめて！ 割れ、ちゃう……！ 身体が、裂け……ッ！」

前後の穴を同時に貫く、圧倒的な質量。

人間の骨盤など容易く砕きかねない二本の極太の尾が、狭い体内をぎゅうぎゅうに押し広げ、子宮口のオルガデバイスを容赦なく擦り上げ、叩きつける。

「ひい……！ あ、ああ……！？ や、やあ、そこ、だめえ……！」

肉体が内側から引き裂かれるほどの、絶望的な激痛であるはずだった。

だが、尾から分泌される催淫性の粘液と、直接乱暴されるオルガデバイスの強制駆動が、その圧倒的な物理的破壊を、瞬時に狂おしい快楽へと書き換えていく。

（神経への負荷係数、限界値の三倍……！？ 駄目、このまま絶頂を迎えれば、魔力が臨界を突破して肉体が爆散する……！ なにか、脱出の、計算を……！）

イリスの優れた頭脳は、絶え間なく続く前後の激しいピストンに揺らされながらも、必死に現状を打開する術を演算しようとした。

「あ、あぁっ！ いや、やぁ……っ！ だめ、思考が……っ！ なにか、助かる、道……っ！」

強制ページによる装甲の破棄？

——駄目だ。すでにデバイスが完全に魔力回路を掌握している。

「んっ、あひいっ！ 外れ、ない……っ！ 魔力を、外部へ……！」

魔力を外部へ放出して臨界を防ぐ？

——無理だ。二本の極太の尾が物理的な栓となって、膨大な熱を体内へ逆流させている。

「ひ、い……！ なんで……っ！ ぜんぶ、塞がれ、て……っ！
ああ、ああああっ！♥」

必死に稼働させた冷徹な演算回路が次々と弾き出したのは、あらゆる生存ルートの完全な「詰み」と、絶対的な敗北という事実だけだった。



前後の同時蹂躪による、極めて効率的な神経破壊。

それに抗う術など一切存在せず、まもなく自分は狂おしい絶頂と共に死を迎えるのだという絶望を、彼女の知性そのものが克明に理解してしまったのだ。

「い、いぐ……！ 神経系への……干渉、限界突破……っ！ ああ、だめ、計算が、追いつか、ない……っ！」

激しい摩擦と圧迫によって、オルガデバイスから異常な魔力が迸る。

それに呼応するように、腰にマウントされた『オルガエンジン』が限界超過の警鐘を鳴り響かせた。

「キィィィッ」という耳障りな魔力圧縮音が、皮肉にも彼女の「死の刻限」を告げる秒読みとなり、イリスの脳髓を犯す極上のスパイスとなっていく。

「あひいっ！ わかってる、イッたら死ぬって、わかってるのに……っ！ 頭が、きもちよさで……っ！♥」

死への恐怖と、抵抗の意思が、論理的な敗北感と共にドロドロに溶け落ちていく。

アナルへの侵入と膣内での蹂躪が暴力的なピストンを伴って同時進行し、彼女の快感は理性の限界をあっけなく突破した。

「あ、ああ.....魔力出力、限界、突破.....っ！気持ちよすぎて、論理、崩壊するう.....！助けて.....誰か.....イッちゃうう.....♥」

苦悶と怒りの呻きは、抗えない快樂の喘ぎへと完全に変貌した。

豊満な胸が装甲の中で乱高下し、内部温度の急上昇によって装甲の排熱口から限界を知らせる白煙が噴き出す。

前後の穴を無慈悲に犯され、腹の底から突き上げる絶頂の波に、精鋭の矜持は完全に砕け散った。

「あひい.....！♥ あ、あああああっ.....♥ もっと、おく、もっとお.....！♥」

高度な知性も、複雑な語彙力もすでに消失していた。

オルガデバイスが狂ったように明滅し、魔力が限界を超えて暴走する。

エンジンの冷却機構が完全に焼き切れ、瑠璃色の装甲そのものが内側からの圧力に甲高い軋み声を上げた。

「イグッ.....！！ あひいいいいいっ.....！！♥」

けたたましい爆発音と、装甲が砕け散る激しい金属音。

限界を超えたイリスの肉体は、狂おしい絶頂の頂点で、瑠璃色の魔導装甲ごと内側から無惨に破裂した。

鮮やかな紅い血と肉片が下半身を中心に飛び散り、瘴気の靄の中で泡立って消える。

残された上半身だけが、血塗れの地面に無惨に転がった。

ひび割れた瑠璃色の装甲から覗く白い肌は痙攣し、熱っぽい吐息と細かな白煙が荒く漏れ続けている。

白濁した瞳は完全に焦点を失い、端正で知的だった顔は、涎を垂らしながら幼児のように蕩けきった醜くも淫靡な表情に歪んでいた。

口元からわずかに泡を吹き、意味をなさない快樂の呻きだけが止まらない。

天才戦士としての矜持も理性も完全に破壊され、そこには徹底的に犯し尽くされた無様な絶頂の残滓だけが、はっきりと刻まれていた。

作品名:淫星獣の贅 虚空の絶頂に散る魔女たち

発行日:2026年5月02日

発行者:XYZ_L

連絡先:<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
